タイトル：平成 26（2014）年度　教育セミナー（第 10 回）
日時：平成 26 年 9 月 20 日（土）～23 日（火・祝）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究　3 階　マルチメディア会議室（304）

「キルマーン地方におけるバルーチ族、アフガーン族による襲撃事案と現地統治機構の対応
　　― 17 世紀末から 18 世紀初頭のイラン高原東南部における政情分析の一端として」
徳永　佳晃（東京大学大学院人文社会系研究科アジア史専門分野）

私は、今回はじめて中東☆イスラーム教育セミナーに参加させて頂きました。始めのうちは長いと思っていた 4 日間も、終わってみたらあっという間の中身の濃い時間でした。

先生方や諸先輩に勧められるがまま応募したものの、当日までは、私のような修士課程に入ったばかりの者が議論についていけるか不安でした。しかし実際に参加してみると、先生方はとても優しく接してくださり、一緒に参加した受講生の皆様も暖かく、受講生同士で互いに学び合うとても良い雰囲気でした。普段歴史学科に所属しており、専門を同じくする方々に指導をいただける機会は多いですが、このセミナーでは歴史学に限らずさまざまなディシプリンの先生方、受講生の皆様が集い、そのご発表や議論に接することができたのが、私には大きな収穫でした。日頃は気後れして手の挙がらない自分が、気づくとたくさんの質問をしていたことは、先生方、受講生の皆様の興味深いセミナー、発表もさることながら、このように開放的で刺激的な雰囲気の教育セミナーならではと感じています。

さらに私は三日目に発表もさせて頂きました。修士課程に入り、ごく最近始めたばかりのテーマでしたので、不十分な点が多い発表であったと思います。しかし先生方からいただいた今後を見据えたご指導や、受講生の皆様がくださった様々な視点からのコメントによって、修士論文執筆を見据える中で、現時点の自分を確認する貴重な機会となりました。特に歴史学以外を専門とする先生方、受講生の皆様に私の研究がどのように映っているのか、知ることができたことはこの教育セミナーに参加してからこその体験だと思います。

率直に申し上げると、本セミナーを終えた一番の感想は「楽しかった」と言うことです。至らぬ点ばかり目立つ私の発表から、ほんのわずかな良い点を掬いとり励ましていただいた先生方や、私の少々的の外れた質問に辛抱強く答えてくださった受講生の皆様のご厚意に答えるためにも、今後ますます勉強を積み重ねて行かなければと感じています。4 日間すばらしい経験を与えて下さった先生方、受講生の皆様、そして陰ながら支えてくださった千葉さん、どうもありがとうございました。